

養氣說

香外書冊

醫療捕養

和書門			
二	四	九	二六
六	七	函	號
五	九	冊	架

內閣文庫			
九	五	函	架
二	四	九	二六
六	七	函	號
五	九	冊	架

內閣文庫	
番號	和 24926
冊數	5 (3)
函號	195 161

三

共五本

香外書冊



A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



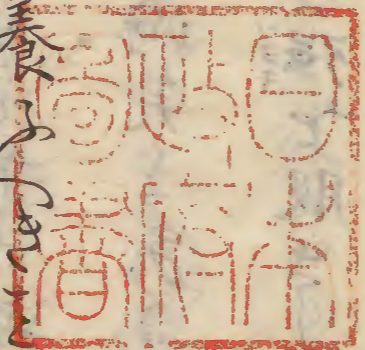
© Kodak, 2007 TM: Kodak



養氣説卷之三

試劔に氣を養ふ

と論に



淺草文庫

近世の劔術者流の頭ヅ手ニ鐵面ン鞞袍ヲを着ツ身體ニ竹ノ甲ヲを纏フ。
 唯亂擊ハキ比較ヒを專ラにシて争ヒ氣ヲを逞クするの徒ニ也。唯其ノ膂カを
 のみ怯シ支體ノ捷勵ヲを人トを比シみ事ヲを多クがゆゑ之
 を學ブものば、殺氣ヲ詐暴ヲを以テ本旨ト習フ憤ルの性ト
 なり。邪念ヲ日々を逐ク増長ス其身ヲを終ル。所謂ハ浩然ノ氣

あるものあることを知ざるは。ことを修る自然は妙意に達
するをこそと思ふべし。その故のや。剣ハ唯此
身を護るを以て一具なり。ことを以て其小人を斬る
ことをのみあつて其心を辨じ。之を試み唯殘暴不仁の心を
長むるを以て務と爲るが故なり。古人もいふべし。天下至
柔馳騁天下之至堅。柔は天下之至堅。遊心於淡合氣於漠。順物自然。
而無容私焉。而天下治矣。とあるは是即道義の極致なり。
柔の剛を制し。弱乃強を服さむる也。天地自然の條理に

し。劍法も亦る是より外なきを知らざるが故なり。
故に眞實なることを修むと庶幾と爲る。其支體を天地中和
し。内外一貫し。其氣を養ふ。天地の間を充塞しむるを。
常に勤る止るの。劍を持つ劍を頼り眼視するところハ氣
必先く之を壓し。乃ち之をさるるを。乃ち之を
その身體手足を忘るるゆゑに。持ところの劍をも亦忘る。
之を以て後其伎をも亦忘る。故に敵の中に入るものハ。其の
づから破る吾之を破る。彼來る破らる。觸るもの

わのぼろく碎く。吾もを碎く。彼來り碎る。居然
とて必勝とて。天機自然の太氣乃活動するも
乃ある故あり。をを劍を持つ劍を悟る。大勇者の劍
法とて。亂撃比較を事とするもの
よく窺知なきとて。よあり。

豊臣太閤。伏見あり。ある日廣間あり。五腰の刀をみるも。
試ふ其人を指しけり。違ひざりし也。前田玄以。誠
神智のあはれ。とて。駭けし。太閤笑ふ。何の子細

も。利家ハ。美麗を好ぶ。黄金を彫る。刀
も。景勝ハ。父乃時より長劍とて。寸の延
多。利家ハ。昔と忘れ。草巻くる。柄乃
刀。他のまゝあり。輝元ハ。異風とて。異
ちる體。江戶大納言。東照宮は。
大勇なり。一劍を頼心なり。とて。ひも。
麗。その志あり。是を以て。察しけり。
の。一劍を頼心なり。

真の大勇を養ふ事あり。ゆゑなり。事あり。劍を持
つるをさういふ。中るもの必挫なきなり。その

大猷公の殊に劍術をこのやまきりまひり。柳生但馬守宗
矩に學ぶ。強に劍術乃為る。此人思慮深き
質あり。改事の太體を知り。故に。劍術の事よき。御教
導申せ。故に。殊に海尊敬あり。なり。それ一事といふ。
天草一揆の時。板倉内膳正を追討使に遣はし。と。
後聽く大に駭き。追歸せむ。馬に追驅る。と。

及び。歸る。其必討死するを。知る。その思慮
ゆゑなり。没後。從四位を贈せ。と。御師
範の。なる。改事。益を得。故に。と。

故に孟子。王請無好小勇。夫撫劍疾視曰。彼惡敢當我哉。此
匹夫之勇。敵一人者也。王請大之。と。と。と。と。と。と。と。
莊子。劍を論じ。目。而語難相擊於前。上斬頸。領
下決肺肝。此庶人之劍。無異鬪鷄。一旦命已終。矢無所用於國
事矣。今大王有天子之位。而好庶人之劍。臣竊為大王薄之。と。

あるとおのりな。まづこの争氣を以て。野卑下劣の勇
と事とあるもの。孟子みることと匹夫の小勇と。莊子
みることと鶏の鬪。犬の噛あひる比る。然るこみ。今
の世の劔術者の積竹杖の相撃と。唯これ小兒の戯劇に均
くよく學得ること。唯是一人一己の競争のみ。君子乃
爲るを伎とある。眞の試劔の法ハ。惟此道と義とを合
し。直を以て術とす。内高明あり外柔順。これ競争陵侮
乃邪念挑撥詐騙の偽術を一掃。心と恬澹虚無乃地を遊
ハリスラ、
ナリホドモクモリモナイ

一め。中和自然の徳を修る。浩然の氣を養ふ。害を以
て本旨と爲るあり。まづ道ハ唯一なるを以て。是れ
弓銃鎗馬及戰陣の法も。まづこれより外なるは。是れ
ばあり。天性の正理を循るものなり。故にその
至大至剛の氣を養得たるの後ハ。其身體從容とす。神氣
充實。假令亂軍の中あり。心常静し
る。思慮盡く汰度中り。身體より發するもの氣が直
に身體を衛護。一呼一吸。太虚に遍ぶ。故に敵を觀る

能^レびよ^レめ^レの^レぢ^レく^レち^レる^レま^レふ^レハ^レ當^レ乃^レ敵^レ不^レ勝^レのみ^レな
ら^レび^レ勇^レ威^レ武^レ徳^レを^レ以^レて^レ四^レ夷^レ八^レ極^レの外^レま^レぎ^レも^レ威^レ服^レを^レむ^レる
く^レ如^レ何^レと^レち^レも^レを^レ其^レ胸^レ中^レに^レ天^レ地^レを^レ包^レ果^レ衣^レし^レて^レ神^レ氣^レ大^レ虚^レに^レ縦^レ
横^レま^レる^レが^レゆ^レも^レあ^レる^レこ^レも^レと^レ天^レ命^レの^レ性^レに^レ率^レと^レる^レ乃^レ大^レ夫^レ夫^レ
乃^レ真^レ勇^レと^レして^レ君^レ子^レの^レ勤^レ守^レを^レ道^レと^レま^レる^レ。

松蔭寺の白隱禪師。江戸乃ある寺あり。説法を席上。
長劍を帶^{サシ}。さも嚴顔^{イカシ}げみゆる大男の士^{サラヒ}あり。を視
る。今の世も武を銜^{ヒケラ}る。長劍^{イデタチ}を帶^{サシ}。容貌^{イデタチ}偽^{ウソ}驕^{ウツク}
る。

人^{オド}を威^{オド}は^ス士^シの。ま^アあ^シと^シと。こ^シハ^シ真^{マコト}の^レ武^ブ道^{ダウ}ハ^シ知^チ
ぬ^レもの^レゆ^レも^レ。事^{コト}あ^シバ^シ。狼^{ウロクエ}狽^ダ度^{タク}を^レ失^{ウシ}ふ^レ多^タき^レもの^レ也^{ナリ}
と。説^{セツ}法^{ポフ}の^レ事^{コト}よ^シも^レい^ハる^レと。の^レ士^シ憤^{イラ}り。や^ガ多^タ説^{セツ}法^{ポフ}の^レ
終^ハり^ハる^レと^シ。高^{タカ}坐^ザの^レ前^{マヘ}に^レま^アり^ハて^レ来^キり。先^{サキ}劍^{ケン}より^レ長^{チカ}劍^{ケン}
を^レ帶^{サシ}。武^ブを^レ銜^{ヒケラ}る。と^シい^ハる^レが^レ。長^{チカ}劍^{ケン}を^レあ^シる^レと^シ
い^ハる^レと^シ。刀^{タチ}を^レ抜^{ヒキ}て^レ白^{シラ}隱^{イン}の^レ鼻^{ハナ}の^レま^アり^ハて^レ銜^{ヒケラ}つ^レけ^レる^レ。
と^シい^ハる^レと^シ。其^{ソノ}心^{ココロ}を^レ制^セし^レあ^シる^レと^シ。握^{ニギリ}拳^{コブシ}を^レ士^シ
の^レ顔^{オモテ}を^レあ^シる^レと^シ。打^{ウチ}つ^レけ^レる^レと^シ。士^シハ^シ乃^ハ勢^セに^レ膽^{タン}を^レ奪^{ウバ}つ^レて^レ

けむ。ろのき。逃帰。とき。道德の上より。おの光耀を
發。人を壓力を生ずる。孟子の所謂。仁者。敵。あ
と。ぬ感應の致。と。ろ。以。観得。る。

越前永平寺乃一面山和尚。道德碩學の聞あり。頗豪氣
の禪僧あり。壯歳より常坐眠あり。睦る人より少く。至
る壯健あり。行歩乃捷。人より勝る。夜道を。事。も。せ
さ。る。の。常。あり。何。年。江戸より京師へ上る。多
人より金三百兩を。託られ。を携る。例の。あり。夜に

あり。岐蘇路を越け。道。盗賊五六人行先を遮。金
を奪む。け。あ。や。刀を抜。斬人。その刀
を。膝を蹴。踏。一階。り。残の者。と打
。皆刀。打。け。氣を失ひ。を
肩息。あり。倒。その隙。通。超。二。三里。と來。跡。よ
。一人の賊。追來。り。今。山。客。ハ。止。奉。公
。思。君。が。豪。勇。の。質。慕。
。あ。それ。召使。り。懇。子。を。許。

る。金囊をとり、男ふとて事を事故なく京師に着。金
ハ贈る方へ遣へ。四五日も過へ。薩摩より老母の大
病ありとて。兄より告來り。音信を驚。直に京師を立ち、本
國に赴き。昼夜母の旁に居り看病し。母の母死し
たり。聲を揚り大に哭泣す。おんど前後を忘る
る。其翼日岐蘇山より附りひ來り。男
面山の前一出。大に懺悔し。岐蘇より谿へ
蹴落し。己を偷長き。そのまゝ死す。皆に

我を復す。さきも怖る僧あり。かく劫師も死す。誰
もあま。何の僧の首と金とを取來り。今より
首魁をもむ。吾行む。いふものもあ。己
よく為果んとて。暮來り。夜ご。狙ぬ。横に
ハ寝る。偶軒の聲ハ聽え。斬む。投殺す。
唯怖る。夏より隙を得。京師へ着。
金ハ人へ渡す。ゆる。首ありとて取。歸ら
む。此。此。此。昼夜乃法孝心。昨日の愁

傷くまひしまひしし状態サマを視みる。熟シユクと顧シまば。今イマままの惡念アクネン造ツクり
し罪ツミの怖コソく。せめくを出家シュツカし。其罪ツミを滅メツむと心ココロを定サぬ
まば。懺悔ソウカイし。めくを申マウする。あそれを子コみぬくまひしし助タ
ままししと。涙ナミを流ナすとりままば。面山オモヤマ聽キくまもあありな
む。吾オレもも爾ニ思シひまり。しし頭カビ刺スるもむも。子コみぬ
しし。此僧コノソウ面山オモヤマの死期シキままも給仕キツシしし。ああのの後ノチ
淺草寺アサクラジの邊ヘリに來キ住スる。自オレの事コトを話ワカししと聽傳キコトする
ちち。この面山オモヤマハハと薩摩藩士サツマノハシの子コなり。六歳ロクサイなり。出家シュツカ

し。武藝ブゲイちちと學マナブるもままなりと。禪學ゼンガクの道義ドウギよりこの
身體シントを和なますははししを知チ。性剛毅セイコウギなりと。ししのの浩然コウゼンは
氣キを養ヤ得トクる。ああののままに至いたる。天海僧正テンカイソウジョウの田間イナカ
住スしし。近村チカムラの劍術者ケンジュツシャ。梅ウメの新條アラダイを以もて比ヒ較カクす。柔ユウの
剛コウを制セする理コトワザを示シ。澤菴サカサ和尚オウソウ。柳生宗矩ユウセイソウノリを屈伏クツフクさすを。
禪理ゼンリを論ロじし劍法ケンポウを參マシるもその意イハ同ドウく。白隱ハクインもこの理
を發明フメイしし。ああのの著アラスししるも書カキくも專マカるもを説セツす。
動中の工夫ドウチュウノクワフを人ヒトに教シへる。白隱ハクインの傳デンへへる。白幽ハクユウの僧ソウ
説セツハハ。卷マキの四ヨシに載ノリあり。僧ソウ

侶をくわくのぶと。況や明哲の士乃心を潜むんばあ
るをあらざるこゝなるべし。

澤菴和尚の柳生但馬守一教訓の書の中。金剛經の應
無所住。而生其心の文を釋す曰。此文乃よみやくをす
み住するところなく。志ありその心を生死を
訓申し。萬の業をまふふ為人とおもふ心が生ぜぬ。手
も足も動ぬ。す。す。心を生く為れば。その為る事ふ
心ぶする。此文は。止る事なく。心を

生死をくわく。その事を為ぬ。心の止るざるを各
人々申し。佛法をく心乃止るところ。執着の念起り。
輪廻もく。發り。此止る心を生死の纜と申し。花
紅葉を見く。花紅葉を見る心が生く。そこ止
らぬ。肝要といふ。慈圓が歌。

柴の戸ふ匂む花はさあはけはるめけぬ。の世や
花ハ無心ふまぬ。心を花ハ止る。詠りよ
と。吾心の色をみ。執着する心をく。みる

もしも聽くも。一所不心をいふめぬを至極と云ふなり。敬の
字を主一無適と註といふは。心を一所に取定る。然らば
「一ち」さぬやうも。後よりぬひて切るも。切るあ
らう心をやめぬを敬といふなり。尤肝要なり。氣を四方へ
張る。身を護
るものあるも。後より伺て斬むと云ふも。害を
さまじくするも。いふも。ぬらう。いふも。澤菴和尚がその文意
乃やと。一應に聽く人ハ。敬ハ。さうも。先。さうも。を
思ひぬらう。畢竟ハ。言。ぬ。故。實。筆。詞。を
尽。す。殊。不。主。人。乃。意。を。美。敬。の。字。眼。
るべし。佛。法。を。敬。の。字。乃。心。あり。鐘。を。三。つ。後。ふ。

掌を合を。敬を白を。と唱あげ。此敬白の心。即主一無適。一心不亂と同義なり。爾雅に。敬。肅也とあり。段。太
令が説文の註に曰。後儒或
云。主一無適。為敬。夫。主。一。與敬義無涉。且。文。子。曰。一也者。無
適之道。淮南詮言。曰。一者。萬物之本也。適。即敬字。非他。往之
義。あり。主。一無適。を敬と云ふ。非。なり。と。云。は。と。も。
吾心の中。立。可。なり。意。必。の。念。慮。あり。私。業。不。流。ぬ。や。
唯。其。心。を。一。に。存。する。と。云。ふ。は。敬。と。む。可。し。
相。手。不。さ。る。と。の。ち。外。一。心。の。馳。ぬ。と。い。ふ。は。適
を心の之と云ふ訓也。程子の説ハ。その通也。然。れ。ど。佛。法。に。敬。の。字
の。心。ハ。至。極。の。處。に。在。り。吾。心。を。一。に。亂。ぬ。や。
修行誓古の位なり。此誓古歲月積

りの意は。自由なる位一ゆくともい。孔子の顔淵は示た
ひ克己復禮也。己の敬の意なり。佛法の上よりいへば。言
もともりつらきこと。聖經に敬を説くところの意は合は
右に應無所住。而生其心の位ハ。向上至極の位なり。敬
乃字の意ハ。心を餘處へ放す。放バ亂ると思ふ。ゆいも
油断なく引結^{ひきむす}。おく位なり。こもは當坐心をちまぬ
一段の事なり。常ふものごとくあり。ハ。不自由なる義
なり。假令バ雀の子をとらぬ。と猫の繩を常ふ引結^{ひきむす}離^{はな}
ぬ位なり。吾心を猫乃繫き。こもごとくあり。ハ。用お心乃

ゆいもちまぬ。とく。猫より。志つけ。おひ。繩
を。あ。い。処。雀。一。処。おひ。も。
ぬ。よ。は。る。ぶ。應無所住の文に合ひ。こも。い。
劍術のう。ま。申。ゆ。つ。太刀を。つけ。打手。心。め。め
る。一切打手を。忘。打。人。を。人。心。を。お。い。人
も空我も空。打手も打太刀も空。と心得。心ハ。は。れ。い
ず。此説の。説。盡。さ。る。あ。る。前段の。鎌倉の無覺
劍術の氣を養ふ。と。論。さ。る。あ。る。祖元禪師。元の亂。捕。ま。る。切。ま。る。時。禪師の頌

み日。珍重大元三尺劍。雷光影裏截春風。といひし道は。太刀
を捨て走りしうらむ。無覺の心を。太刀をひりりと振
うらむ。電のひつらうとまはる間何の
心も何の念もなほ。打太刀も心はぬ。切人も空。打太
刀も空。うらむ。我も空も道は。人も人もあらは。打太刀も
太刀もあらは。うらむ。我も我もあらは。うらむ。電のひつらう
とまはるうらむ。春のうら吹風を切らむ。一切止らぬ

心あり。此禪元を斬と能いざらむ。無念無想あり。身體
は虚空の障とわらふ。うらむ。混一あり。

あり。禪元が意は。天命する。斬らむ。斬らむ人も。然な
く。斬人も思は。残は。虚空の風も跡なき。うらむ。
決定する。うらむ。日蓮を片頼らむ。斬らむ。大覺の
命を免らむ。ハ。身命を弘法のうらむ。惜ざる
勇猛心も。養得らむ。浩然の氣の身を護らむ。故に
其事跡は。祖元と全く同一趣あり。ちる。後條の氣も身を
護る力あると。論は。風を切らむ。手も太刀も覺あ
る。うらむ。あやう。心をわらむ。萬事をまらむ。上手乃
位。うらむ。舞をうらむ。手も扇をうらむ。足を踏らむ。手足を
よむ。扇をうらむ。舞をうらむ。おもひもを忘らむ。上手
うらむ。うらむ。しやう。手足も心を止らむ。業を面白らむ。

やまざる。何事も心をさへさへしむる所作は皆く
何れも。

敬ハ、向つのみ心のむき。心を引締、しよの思つこ
たるよう。向上の位みあはばといひ、一應ハさへえこれども。
敬も至極の處一到ぬ。バ、るのきふ。應無所住。而生其心
の趣と同一き。差別あるもの。孟子が放心と求むる
つゝと敬する。邵康節が心ハ放んしを要さしつゝ敬
なる。敬と不自由なるといふ。その不自由より入る自由

自在を得る。なる佛者の五戒を擧げ後、發悟し道
乃真面目を得る。心ハ自在なる。身ハ猶五戒の地
みあはば。故に程明道が曰。天地設位。而易行乎其中。
只是敬也。敬則無間断。す。朱晦菴も敬纔間断便是不誠。
といひ。日月の運行。四時の轉變。草木の花さき。實熟。人
の寤寐動作も。さへ敬みあはば。故に易に。繼
之者善也。成之者性也。とある。仁義禮智も。一切敬みあ
らば。澤菴が書ふ。諸佛不動智を論じ。修行の

功積りて上達しては、初め何れも知らず。心もわきま
時のやうにあらざるを。音律の一の初め低きと高くする
數へて上無の高きと下ありて下無の低きと。一の下と一
の上と隣りあはざるを。譬喩するに同一趣あるを。此の
敬を不自由なるといふは、敬の始終相離ざるをの意
とを論ずるにきつみ。自語の相違をみる。後の卷
の調息の法を説くは、心を臍下兩膀の間の人身に
樞軸を在しめ、天機を養ふ。この敬の位なるを。功成

氣剛なり。ぬきば、その事をも忘る。浩然の氣乃天地
を充塞するを自得し、身心をも忘る。此氣ある
とを知之。此に至るは、適と相對するものなり。莫
と執滞する所もあらず。乃適も忘る。莫も忘る。中
おのぼる道あり。故に程明道が言ふ。君子之學、莫若廓
然而大公。物來而順應。との無心といふを。この廓然
而大公なるものをいふを。意得るは、大り
誤るを。此義一端をハ説盡あり。

兵を詭道といふを論ず

今撃劍者流乃兵者詭道也。といふ語を以て。劍術の奥儀と
あつるを。あつるを以て弟子に教ふる。是亦大なる差謬也。
故如何と云ふ也。この語ハもと孫子に出る。亂を制し逆を
平らふる。止とを得びし。軍兵を用ふとをいふ語なり。
劍の上の於て言ふ事と云ふ事あらざ。此事小なる事似ゆる
といふ事をも。試劍を詭道といふ事あり。劍を契と
きふ事。必以常事詐暴奸智を以て心の主と云ふ事あり。

ケンビエツツカヒ

アヤマリ
ニチガ

ダシ
テアラ
サルダエ

思ふ事あり。遂に邪道に陥る故也。亦辯を乞ふ事あり。

軍ハもと世の躁亂を鎮殘暴を退る。以て國家天下を治

んる為也。殺少生多乃心より行ふ事なり。術を以て。譬バ

小兒は利刀を玩弄する事あり。強く事と奪ん事あり。

故に事あり。打擲き叱懲る。事と離る事あり。

予こと。我整の術に於て。病ある事あり。鍼灸事あり。吐下の

劑を與る事あり。名將の兵を用ふる事。他國を奪。利を計

る為事あり。唯慈愛惻怛の情より出。事と止るを得

イタミク
カア
ソナト
オモフ

以て之をあれを用ふる。敵及麾下の兵を殺すの術を以て
要と爲す心より。その説道を用了と爲す事。直に仁の
術を以て。天心に合つるものなり。且説ハ詐も。欺も。違
とも。戾も。責も。訓字を以て。説道と爲す。常格に違ふ敵の不
慮も出るといつる意なり。且兵と爲すも。軍卒の稱を以て。其
撃持と爲す所の器を兵器と爲す事。劍も。其の一にして。兵
器も。其の事也。今槩に兵と爲す事。軍旅の事なる事
知べし。その語を以て。唯劍術の事と思へる事。孫子も

讀く事。其の文旨ある人の言となす。軍に此説道を用る
ハ。もや無道の人を對し。止むを得ず。行とする所の詐
の權道なり。決して好んて爲す事あり。故に之
を用ふるも。唯天心に合ふ事なり。其本旨と爲す。其術ハ。用
る用ざるを示し。近くと爲す事。遠くを示し。利を以て之
を誘ひ。彼を亂し。後之を取。強きを弱く。これを避怒
し。めく事。を撓め。親む事。を離し。其為とする
行とする事。其不意に出。敵を以て。其胸臆を測る能ふ

らむを。こゝを兵を用ふの詭道といふ。畢竟ハ彼も道
に背を以て。正道を以て相對するをあらうとする。止を得ば
し行とてその權宜の術をばちりぬ。

東照神君乃大阪に於る。三女を以て其返答を相違せしめ。

片桐且元を離間し。こゝを攻めんと。彼が困迫

の期を待て。和睦を許さし。その和睦必破んとを豫知め。

破る後。再攻てこゝを取らむ。御軍畧の詭道尽く天

心合せし。所謂大信不約といふ。大

信義を守らむ。至仁の御思慮あるを察し奉らば

一。安んずるを議し奉るものある。勿體なきなり。

故に軍法に於て。詭道といふ。至當の

稱也。今帯するところの劍を。唯是此身を衛が為の

一具なり。安んずる人を斬らむものなり。止を得

ば。こゝを揮て。必勝中なる。直に破る。皆

これ私意に出で。あるを之を教る。暴戾殘忍の事為す

何らざるを論む。唯左を突とみ。右を斬

上より撃とおのりをもつ。下より衝をまねく。奸邪詐妄を以
て之を欺く。故に兵者詭道也といふを以て。あつと試劍
の法ありと。勤住。吾身を護の道と忘失。わづらひのさう
卑劣。柳炭の心を以て。術の主意と為。良家の子弟を誘導
。冥路に迷入。めま。これ生涯を過す。むす。是大なる
邪見あり。びや。嗚呼。世降人劣。吾輩乃術に至る。ま。之
より已甚。ものあつ。ま。今を生を受く。ま。の不幸に
。痛哭流涕。長大息する。ま。ま。ま。
ソットコエラアゲテナキ ホットクイキマツク

近古さる劍術者。一人の才子を試む。おとひ。汝あの
柱を切。みせ。つひ。才子心得。刀を扱
柱。あむ。切ん。躊躇。敢。切ん。ま。
。あ。ち。ぬ。問。吾。敵。心。無
ゆ。これ。切申。答。を。聽。汝。ま。
。ま。上。達。し。つ。つ。と。つ。怡。ま。今。の。世。ま。
。ま。ま。ま。解。つ。劍。術。者。の。ま。あ。ん。ま。世。ま。交。ら
。ま。身。ま。の。有。無。も。知。ま。

今此劍法のむかひなき。幼若無知の輩とて。こればどるなり
か。不詐譎暴戾の事を示し。唯敵を誑なぐるとて以て。劍術武藝
の本意ちうといひ。これを傳へ。此方乃奸術を以て彼方
の奸術を比較能誑者必勝故に刻苦能く之を學得る必
勝の地に到ぬるを以て。其志もすく從て擾さわざるを得
じ。素よりあり不邪見を主とす。そののの寛柔以教不
報無道といふ。正大高明なる君子の真勇を觀知なきより
むかひなき。其年老るウチチチ聲力や衰るともなき。師も亦

弟子は勝て能ひ却て弟子の爲に侮らるるを以て。偏なき
黨なき。不敗の地に安居る。老る益壯なるの樂あることと
思ひ。柔能剛を制する自然の條理を辨知するが故なり。今
此浩然の氣を養ひ。至大至剛の境に至る。天下を睥睨ヒラミツケルする
の道に於て。軍法といふも。亦く外なき。その
天地を充塞ミツルする乃大氣を以て之を蓋オホフするのみ。百萬乃
軍兵を支揮サシヒキし。周旋自在なるのみ。猶手足を用るが如く。不
辱し。故に司馬法に。軍法を論じて曰。古者以仁爲本。以義治

之之謂正。不獲意則權出於戰。不出于中人。是故殺人安人。殺之可也。攻其國愛其民。攻之可也。以戰止戰。戰可也。又曰。國雖大好戰必亡。天下雖安忘戰必危。尚戰爭の意ととを得ば。用るものちをて示し。尚戰爭の意と語。曰。爭義不爭利。是以明其義也。とて居るの類。悉行義を以て軍術の極旨とてざるをぬ。是大將たるもの第一の領解。んばあそふ。とてざるをぬ。

豊臣太閤。卑賤より起る。天下の權を掌の中へ握。四夷ハ極を睥睨する。の大勇あり。とて居るも。國家始る平た。乃時あつ。驕慢の心增長。遂に士民乃患難を。も忘る。己が利欲の爲に。辜も。朝鮮を侵掠。再無益の兵革を用る。み。我。神祖乃義の爲に。信雄を助。豊公乃鋒尖に對し。聊も屈し給。眞實の大勇乃兵と。日と同。大河内秀元が。朝鮮日記。みるの軍略を載。秀吉が鞭影を以。高麗國の八道を先。大明國の四百餘州。南蠻。吉利支丹。

國。其外の遠嶋までも。武命を限り切とる。異國軍兵
の頸塚を日本に被仰付事。且ハ和漢後記の爲なり。然バ
戦場の高名ハ。言ふ及ぶ。老若男女僧俗に限り。賤し賤し
至す。普羅切其首を日本へ渡すものあり。嗚
呼。此に至るは。惨酷不仁の極。其壯歳の時。似む。今之
と聽ふ。股栗る。如くあり。悲哉傷哉。其英明寛大の
天質。和漢未曾有と称せり。豊公の盛徳なるも。學問な
り。仁義の道を知り由なり。乃晩年。至る。凌厲
テアラタル

暴惡の心を起。刺漸に居を安ん。諸國の士とる。
再體軀を異境に困苦にめ。其妻子とる。離別の悲哀に。
腸を断の念を爲しめ。軍令を出し。仁慈を以て懷服
む。更に言ひ。罪も。朝鮮の士民を悩め。命
僧侶樵夫老若男女の差別なく。殺し。殘る。命
し。心ありけり。地を得。耕
民なく。は何の益あるん。大智忽變。の
至愚とあり。寛裕の質化。狂惡乃行。あり。金

君子の大道を知らざる故らめ。浅野長政の直言し。狐
のつきさるるちんそりしし諫るる確言も。惜みぬ。
莫大の勲功も。此に至る空くち。世を歴びく滅亡せ
しハ。天命の然しむ子とくろみし。我
東照神君乃濱松より速みろ乃招み應じ。至仁
乃法心と。此に至る霄壤の隔とぬ。興亡の跡。今も於
こころを鑒る。思や致る。第一なる事とみらあはるに
や。

氣乃身を衛護す。壓力あることを論じ
孫子。勝者之戰。若決積水於千仞之谿者。形也。善戰人
之勢。如轉圓石於千仞之山者。勢也。軍術もこれ
形と勢と專ら説く。大將も人の身體の樞軸を直し天
地の樞軸と。一を以る貫つる。浩然の氣をその樞軸と
振蕩る。その外一張出。そのを以る一軍の形勢を
熾み。それ光輝を發る。敵を壓倒し猶積水と。洪み
積る水の通る路を決り。千尋の谷へ落る。圓石を

巔^{サカミ}より險^{ケン}を阪^{ハン}の下へ轉^{マシ}墮^ダがぶるも形勢^{ケイセイ}あるをいふ。乃^ノ神速^{シンソク}自在^{ジザイ}なり。動搖^{ドウギョウ}周旋^{シュゼン}進退^{シンタイ}出没^{シュツツツ}。まなご已^イが手足^{テウ}を揺^ユおろくあるをいふ。大將^{ダイショウ}の身より乃^ノ光耀^{ヒカリ}を發^{ハツ}するハ。猶^{ナホ}佛像^{ブツゾウ}の光明^{クワウミョウ}を畫^エるも乃^ノ佛^{ブツ}の體^{テイ}より發^{ハツ}する乃^ノ眼^{ガン}の遮^{サセ}るも光明^{クワウミョウ}あるをいふ。乃^ノ體^{テイ}より發^{ハツ}する浩然^{コウゼン}の氣^キを畫^エるも示^シすなり。法華經^{ホフケキョウ}序品^{ジヨクヒン}の釋迦^{シヤクヂヤ}如來^{ニョライ}の坐禪^{サザン}の狀態^{ジョウタイ}を説^{トク}る。放^{チヤウ}眉^{メイ}間^{カン}白毫^{ハクコウ}相^{ソウ}光^{クワウ}照^{シヤウ}東^{トウ}方^{ホウ}萬^{マン}八^{ハチ}千^{セン}佛^{ブツ}土^ツ。靡^{ナシ}不^フ周^{シュウ}徧^{ヘン}。乃^ノ光^{ヒカリ}耀^{ヨウ}乃^ノ至^シ大^{ダイ}至^シ

剛^{コウ}乃^ノ極^{キョク}よりあり。矢^ヤ石^{シヤク}も亦^{オモ}を侵^{ケン}る能^ノべ。刀^{タウ}杖^{シヤウ}も加^カる能^ノべ。強^{キョウ}くもを侵^{ケン}るも猶^{ナホ}空^{クウ}に對^{タイ}し磔^{シヤク}を投^{ナゲ}るも亦^{オモ}還^{ヘン}る其身^{コノミ}中^{ナカ}なるなり。

孔子^{コウジ}宋^{ソウ}に適^{テイ}す。弟子^{テイシ}と禮^{レイ}を大樹^{ダイジュ}の下^ノに習^{シユ}ふ。桓魋^{ケンタイ}孔子^{コウジ}を殺^{コロ}むと欲^{ホシ}す。衆人^{シュウジン}を以^{ヨリ}て其樹^{コノジュ}を曳^{ヒキ}倒^{タダ}さす。諸弟子^{シュウテイシ}之^ノを怖^{オソ}す。孔子^{コウジ}を勸^{コウ}す。速^{ソク}するの處^{トコロ}を去^サる。孔子^{コウジ}の曰^{イハレ}。天^{テン}より德^{トク}を予^ニ生^ナず。道^{ミチ}をこの世^ノに傳^{ツタ}へむ。桓魋^{ケンタイ}暴惡^{ボウアク}なり。天^{テン}に違^{ヒガ}背^ヘす。如何^{ニカニ}も亦^{オモ}能^ノく。

らむ。さうしうぞ。玄蕃が人馬とて辟易し退る。といふを。猶項羽が赤泉侯を叱しに似る事あり。假令今その勇威乃項羽豊公不及と能ざるものと雖も。然の氣を以て人を壓倒なきことを試むるを從上論する。とこの試劔の法。雑伎といふも。この旨を理解せざるもの。それ奥妙を自得し。其盡其無妄の誠。惟一を以て貫するもの。一理を究る。萬事に通達する故あり。

小牧の軍中。豊臣太閤より。東照宮へ書翰を贈し。侍返書なく。渡邊半藏重綱。水野太郎作重兩人より。三河者を下部に。一足も逃るといふ事を。亦も存せし。豊公の讀も終。大に憤馬牽よせし。乗僅四五騎。松原の小塚の上。臀をくち。敵の大將も喰つ。大音を呼ぶ。小牧より見。唐冠の曹。孔雀の尾の羽織を着る。秀吉と道玄。鐵炮を並打。豊公。天下の大將軍

みち矢玉のあふふをのうはとりて。あづくと歸られり。
その一言ふ心を潜るぬうく思慮あるを。

豊臣太閤。小田原を十重二十重に圍り攻らんとす。伊達政宗後へ到りて憤り。會津仙臺の地を速に歸り。米澤三十萬石を領するを命じ。汝ハ邊鄙の小競あひのをも知。しやと天下の大軍を省く。とあるを。吾も從て來りて。扈從一人も刀をもたず。石垣山の深谷に臨み。巖の上を昇り。あま

誰が陣。あまハあまの營とす。政宗も指さす。あめを。うち。聊も後を顧び。そのとき後を踏立。政宗も頭の上一磐石を戴。あまごころあやさ。敢て仰視と能。あま。流石乃政宗も膽を拉。あま。あまの光耀の人を壓む。あま天縱の徳ち。全く浩然の氣乃覆。あまの力用あるを觀。あま足する。あま。豊公の身體。自然とあまの大なる光耀を具。あま。下賤より出。あま。天下の權を掌の中。握る。あま。大器量と察する。

大阪冬御陣也。御陣を茶春山へ移さしむ。後り。

神君唯一騎。城外の攻口を巡見しつゝ。台徳公聞

め。急ぎ出さるるゆひ多。同く巡見しつゝ。天満の攻口

の柵外より御馬を停し。城中の形勢を臨鑿しつゝ。扈從

の衆徒おひくみ馳至る。城より頻ふ火砲を發しつゝ。

ども。兩君の御身も丸のりまをるゝも。御馬の前へ

進み歩卒一人火砲に中り死に。信幾野堤乃際より御馬至

り。火砲をびびり。堤の上へ降んとするものあり。それ時

神君もあつめ。のどききるもれちり。宣ひ。忽ち堤の上

へ降りしむ。ひり。台徳公もつゝ。あがき

ら。悠々と四方を台覽あり。ちり。其後日を徑つ。す

兩公諸將の攻口を巡覽しつゝ。天満の仕寄場乃外へ

出さるるゆひ多。城より打出丸のをげり。本多

上野介諫争しつゝ。御許容る。永井右近太夫。小栗

又一。島彌光衛門駒を並り立塞り。城中も御巡見と察

し。大銃を頻り發し。後藤基次が曰。城中より鳥

銃ののびとくりに烈さを厭は。柵外に進むとを鬼神

あゝびんバ能き。 兩御所を實に神武の英雄なり。名

將みを矢炮の中らざる理あり。必發するをのびとくりに之

と制す。後藤基次が。此辭を考ふる。深意あり。其理ハ言とくりに乃

と制す。之と制を。心中を天徳寺を。聽め。後藤も。清泣を發す。 兩公堀際ま。到。悠

と還御し。中ぬ時。嶋彌九衛門が鎧の草摺に火炮中

と還御し。鳥從の士と。 兩御所の一氣の中。敵大に憤り。身と害ふ。敵大に憤り。

還御の跡より。大銃を頻に發つ。ゆゑふりの丸を茶磨山

一呈^{サシテ}物重三貫目。四貫目餘の大丸二百餘あり。

り。

台徳公攻口御巡見のとき。有馬豊氏が陣所より井樓へ

上ら。城中に御馬驗を視。大銃を打。

井樓を下。海。ぬ體。

水野日向守來。物見と巡見の差別

あま。陣。殘。巡見あり。一所に。浦を

志貴野を御巡見然る。旨を申。則

井樓を下さるるをひりり。此 兩公の所為を。凡庸の人
の心より視るべきや。はちを危るるを。彼
桓魋の樹を倒さむと。孔子の在る。敢て怖る
るが如く。智仁勇の三徳を具する。御體より
此浩然の氣の大光明を發し。泰平の基業を建する。ゆ
ひるる。二百五十餘年乃今ある。猶赫々
と仰る。仰る。崇むる。の至極なるを
乃ちあらざるんや。

朝鮮の役也。加藤肥後守清正ハ。蔚山より二百五十餘町
を隔る。西生海に在城也。蔚山乃軍兵過半打死。籠
城危る。と。再び。大明の大軍を圍む。落城近
あり。と。聽く。清正。黒絲威の鎧。内曹の緒を
締る。扈從十五人。使番の士五人。持筒廿挺。歩卒三十人の
を引卒し。七友航の小舟を乘る。馬驗を船の表にお
立。大明四十萬騎乃兵の陣取る間近く操る。ん。押
寄る。清正大音揚る。今おの危急の時中り。水夫の

中^{ウチ}み^も懈^レる^のあ^らむ^を。ふ^はま^り海^底一^斬ち^もな^る。若^し
ま^す時^刻遅^く。敵^の船^手と^りに^らる^也。城^中一^入ち^も能^く
び^ば船^中の^水夫^さら^び悉^く斬^捨る^後腹^あを^切る^也。城^中上^下
の^目を^覺さ^す也。海^中一^飛入^る。龍^神と^頭を^虚空^を飛^行す^也。
鉄^火石^を降^しる^也。大^敵を^塵み^まな^りと^呼り^く。長^刀を^杖
み^突く^也。歩^の板^を踏^鳴す^也。艦^船を^廻る^也。多^聞天^の
お^もく^もも^も。大^軍の^箭火^を。夜^も白^晝乃^もち^もち^も中^を
お^り行^す也。敵^の射^出は^矢炮^の雨^霰の^おも^くも^也。

事^もと^もび^{。蔚}山^城一^乘入^り。あ^も則^清正^の義^勇を^以
て^養は^る。浩^然の^氣の^干と^も城^をお^もく^も。四^方を^衛護^す
と^もゆ^もふ^身も^矢炮^も中^らず^也。士^卒や^もも^も事^故な^る。
上^下百^人も^足ぬ^軍勢^を以^て。易^くと^蔚山^一加^勢入^る
。安^危を^俱も^もと^もも^も乃^大義^勇の^心乃^天地^を
を^貫く^也。死^すの^後乃^今日^に至^す也。其^の神^靈
の^猶存^るの^あら^む也。人^を記^す断^つ也。
感^應の^妙の^理を^默識^す也。コロニガランズル。

つゝその子忠廣ある夜の物語予ハ大カあせり
あのみち。重き鎧二領重く軍に出なむ。怖るこあ
とひけふを。飯田覺兵衛つゝと聽先殿ハ物具一領
も。數十度の戦ひ。終り手負をうまひ。朝鮮を攻入
も。鬼將軍と異國の人まゝ畏るなり。死生存亡ハ皆こも
天命も。人カ乃及ぶまあ。國中の民を撫育し。諸
士も。懐服するも。帷幕の中ハ勝敗乃理を定る。大軍
を支揮し。進退も。整るも。三軍の着る鎧ハ悉皆

大將の一身を襲くるも。同じ。か。真勇の軍。誰の
るの鋒先を争む。故に臣を強カを好む。海を然
と存ざばと申す。退出しけふ時。先殿みちの
まも。勇。つ。あ。の。聲。を。あ。び。泣。け。み。大
將。の。專。試。劍。柔。術。矢。炮。等。の。小。勇。を。の。講。ぶ。を
を事。國家天下を治る乃大道を學ぶを知らる。匹
夫の所為を樂とせふ。有徳者の志あは。此
覺兵衛が説ハ。至當の論なり。聖賢の道と

學ぶるが故に。清正の人を優へる義勇ありと云ふも。其
勇猛の甚るる。殊軍を好む。人を多く殺つる天咎の。其
後不及。忠廣が志を至愚の子を生じ。國に及至
ぬるを。覺兵衛が知不及。學問が故あり。
あの鎧を頼む。臆病心の起る。所謂浩然の氣の餒
悴ある。畢竟ハ不徳あるゆゑあり。覺兵衛が
死生皆天命ある。死ぬるを決して死ぬる
はあり。甲斐の信玄乃麾下。一人の臆病者あり。あの者

信實も志あり。戰場に人の斬らるるを視
やう。太鼓の音を聴く。身振一戦慄して止む。自
己を憂嘆する。信玄下知る。楯板を繋げ
矢炮の中へ立あつて。幸ひ矢炮も中び
死なず。臆病も止む。人並あり。一
切の事大小の。皆其心の存尚。由るのなり。因ふ云く
清正。熊本在城の時。ある夜。厠へゆき。厠の中より。庄林
隼人を召さけ。隼人何事なると。急ぎ登城し

の。清正ハ仍^ホ廁の中ニあり。清正疔を患るゆゑなり。廁を出
ると。尾張^{ハタチバカリ}の隼人を近づけり。さき卒^{ニカ}ニ呼ぶる。其方の家
來^ハ年二十許の下郎。いつも苗乃袖^ハの單羽織を着
たる奴の名ハ。何と云ふ也と尋りし。隼人答ふ。出來助
と稱^ナ。尾張乃産み。心利^ハなるもの。草履取といふを
おさる。いふ。清正。さし。其事。川尻。芝居能あり
し。看^ミお行く。さし。の出來助。小使^ハきたるを邀^ハ見
たり。肌^ハみ。鏈條^{クネリカネヲ}衫を着。脛^{スネアテ}織^ハを。今太平。ニ
たり。人の用意も疎^{オロカ}き。さし。下郎。み。め。さし。
さし。今思出^ハ。人乃壽命^ハを定^サた。さし。の
さし。汝。我。の中。一人死^ハ。彼。の。さし。
お。さし。忘^ハぬ。さし。召^メよ。さし。
さし。の。旁輩^ハ乃嫉^ハも。あ。さし。高知^ハ
無用^ハ。速^ハ。さし。汝。風^ハ引^ハ。さし。
れ。酒^ハを喫^ハ。歸^ハ。隼人感^ハ心^ハ。その夜^ハの中^ハ
出來助^ハを呼^ハ出^ハ。委細^ハを。祿^ハ六拾石^ハ與^ハ。近

習のすまらうたう。この者果して忠節を勵むると
あり。わらふ末の末なる奴隸の所為シヤガやうも心を共に人を
使ふをもまなぐ慈愛あり質ツクシちういふ。いふは朝鮮の
役の議を怡び。豊公乃暴逆を依タテマむ。もむぐも惜むなき
あゝあゝあけふ。

氣を養ふを仁乃術や。人を使ふの本なきを論じ
治國と軍略と。其要とまなぐところは同く仁を以て本と
まなぐ。三軍の衆百萬の師も。輕重を張設テウセツするも。唯一人乃

仁心より出づ。此浩然の氣の屈伸カクシン出發。進退自在を得るを。

氣機キキといふ。機ハ樞機スウキの機や。明德を明や。天下國家

を治るも。天地鬼神を感動をカントウむらふ。大將の卒ソクするも

その軍兵を。吾手足を使ひ。自在を得るも。まなぐ

此氣乃樞機スウキのよふものなるも。其他ホカの地機チキ事機ジキカ機カキの三機

の軍略も。皆その氣機キキより生じたるものなり。四機乃各目也。吳子五出あり。

智仁勇三德兼備の大將ハ。必その正大高明の氣機を以て。

大軍を支揮カキキし。向一を破り。中ナカを碎く。其勢セキ烈レツ火破竹ヒヤクの如く。

わらふ。その身を。從容寛和エルヤカニオチツキ知チ。居然ガトシテ。必勝の利を全シふ
まらば。是則天命に率シタガフ。是乃軍配を以て。故に此
軍配を以て。天下國家を治る。亦以て泰平を致し足
り。如何と云ふは。即所謂明德に。心の本體を以て
其中。自天地の間。あり。ゆゑ萬物の理を盡具。明チを以て
その中。喜怒哀樂。徧固執着の私欲。之を蔽ふ。その中
に。その放。その光明の裏。天下の萬有を包括。之
を君一人の懷中フトコロウチの物とする。故に。人の智愚賢不肖をも。

其一言を聽。自明チ。其心を察。知。故に孟子に。
浩然の氣乃切用。言を知。論。曰。諛辭。知其
所蔽ラオホヒ。諛チ。一片なり。其心
の心乃辟。自己の好。其心を蔽オホヒ。其心
あるを察。知り。淫辭。知其所陷。常人。異。不
は非理。或ハ神佛を佞。神佛を非謗。其心
の陷。道を離。其心。邪辭。知其所離。

みあふとを古人に必^スくを論^スべしと^モ。と^ルふ我^ノ者^カ
し^ムもの^ヲを怡^ビ。已^ニ勝^ルもの^ヲを厭^ミぢ^カる^ル。富貴の人
の通^ズの情^チも^モ。佞^ツ諛^ノの者^モい^ハば^キ心^ヲ得^ル。自^レ己^ノ
ま^シく邪^レ僻^ノの^レ者^ノ。陷^ル。昔^ハ在^リ楚^ノの^レ蔣^ノ王^ノ事^ヲを謀^リ。群^臣
の能^レ及^ブの^レ者^ノ。大^ニ憂^フ。朝廷^ニ於^テ吾^ノ不^レ優^シ
る師^友も^モ吾^ノ不^レ幸^シ。其^レ過^ヲを聽^ク能^レび。吾^ノ國^ヲも^モ殆^ク哉^シ
と^シひ^キ。實^ニ確^ニ言^ハる^ル。凡^ソ君^ノ人^ノの^レ心^ヲに^レ機^ヲ用^フ。り^テ
く。世^ノ間^ノの^レ風^俗は^レ必^ズ變^化する^ルもの^ナら^ズ。弘^ク聖^賢の^レ書^ヲを

讀^ミ其^レ旨^ヲ得^ル。古^ノ今^ノの^レ治^亂興^亡の^レ跡^ヲを温^ク。之^レを今^ニ鑒^ミ。
良^シ師^友を^レ得^ル其^レ教^導を^レ受^ク。已^ニ過^ヲを^レ知^ル。怡^シ能^ル人^ノの^レ言^ヲを^レ容^ム
み^テあ^リ。よ^クの^レ者^ノ。人^ノ懷^キ民^ヲ服^ス。以^テ至^リ
治^メの^レ化^ヲを^レ致^ス。故^ニ易^シい^ハ。言^ハ行^ハ君子^ノ之^レ樞^機。樞^機
之^レ發^ス。榮^辱之^レ主^也。言^ハ行^ハ君子^ノ之^レ以^テ動^ス。天^地也^{。可^レ不^レ慎^ム乎^と。}
この樞^機の^レ事^ヲを專^ラし^テ説^クあり。夫^レ君子^ノの^レ過^ルもの^ノ者^ノ
ハ^レ化^ヲ存^スる^ルもの^ノハ^レ神^也。上^下天^地と^レ流^ヲを^レ同^クス^ル。豈^ニ
小^補なり^とい^ハむ^や。則^チ此^ノの^レ謂^ハる^ル。

孟子の浩然の氣を説く。唯道理上よりこそとり。今ハ
武術音曲伎藝等の實事ヲ驗くするを論じたり。近きよ
く遠きよ及ぶ。卑きよ高きよ階るの路を指示する
るなり。後段を調息の術とする。浩然の氣を修得する
を記す。篇を終る。唯此絮叨の空言無用の瀆告。畢竟
ハ唯易簡公平の大道を發悟あるんを庶幾なり。

自明の理を論ずるは其の理を明かにするに非ず。其の理を明かにするは其の理を明かにするに非ず。

養氣說卷之三

史政言

